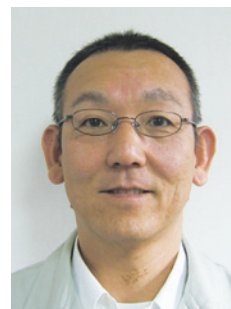


未来への継承にむけて



取締役 建設事業本部建設工事本部長 佐藤 充

— はじめに —

1985年創刊号から昨年号までの技報に目を通してみた。巻頭言では、錚々たるメンバーが多く貴重な意見を述べられている。気付いたことは、自身が担当した多くの現場が写真で紹介されており、懐かしく当時を振り返ることが出来た一方で、一度も執筆していないことに気付く。

いま自分は、技術評論の執筆にふさわしくないと思いつつキーボードを叩いている。どうか、貴重な紙面を汚すことを許していただきたい。

— 技術と伝承 —

私は入社2年目から14年間、他社が親とする共同企業体の一員として数現場に従事した。わからない事ばかりのなかで、他社の先輩たちに教示を乞うために、質問の仕方やタイミング考えて、話しだす機会を伺っていたことを憶えている。周囲の暖かい支援を得て今の私があることに感謝している。

14年間のうち現場と現場の狭間は3回で24か月あり、その間は自社に戻って工事計画業務に就いたが、自社の機材や協力業者との本当の付き合いは、入社16年を過ぎたころからであり、自社機材の利便性の高さや協力業者の頼もしさをこの頃から感じ始めている。

現場では先輩や作業員を講師として、架設・溶接・ボルト・塗装等、各々の工種で施工や管理のコツを覚える。これが施工管理の技術とすれば完全な経験学だ。多種多様なコツを学習して自分なりのコツに仕上げる。そのコツを創意工夫でアレンジしてレベルアップする。

我々の周囲にはそのコツを習得した職員や作業員が豊富である。それをどう集結するか、また伝授す

るかが課題となる。上位者はよく「最近の若者は・・・」と非難することがある。これはいつの時代でも言えることで、世の変化と認識しなければならない。教える側にも習う側にも貪欲な向上心が必要であるが、経験豊富な上位者が未熟な下級者に対し、どこまで視線を下げて教育できるかで技術伝承のスピードは変わる。

あるとき、鳶職の棒芯が言った「橋架けを難しいと思ったことはない。難しいのは人の使い方と人からの使われ方だ。」との言葉が今でも忘れられない。チームワークが重要な社会において、背景を察したうえで、どういうふうに指示したり受けたりするかが、私自身一生涯の課題であろうと感じている。

— 安全への挑戦 —

一般に技術を評論する場合、新製品、新工法、高品質、工程短縮、低コストに目が行きがちであり、安全が話題になることは少ない。しかし、技術は安全のもとで成り立っていることを忘れてはいけない。

福島第一原発事故に関する「政府の事故調査検証委員会」の中で「失敗学のすすめ」の著者で知られる畑村洋太郎委員長は、100年後の評価に堪えられるようにするため、事故からどのような知識が得られるのかを整理した「7つの所感」を政府の事故調査検証委員会の最終報告書に示している。その内容は、

- ①ありうることは起こる。ありえないと思うことも起こる
- ②見たくないものは見えない。見たいものが見える
- ③可能な限りの想定と十分な準備をする
- ④形を作っただけでは機能しない。仕組みは作れるが、目的は共有されない

- ⑤全ては変わるものであり、変化に柔軟に対応する
- ⑥危険の存在を認め、危険に正対して議論できる文化を作る
- ⑦自分の目で見ても自分の頭で考え、判断・行動することを認識し、そのような能力を涵養することが重要である

上記は「安全神話」に潜む危険性を訴えたものであり、安全意識は変動する時代に対応する必要性を説いている。

この意識を現場に従事する者全員に浸透させることが出来れば労働災害は減少し、自然災害に対する予防対策がとられ、国土強靱化に唱えられた、自助、共助の精神を、世代を超えて受け継ぎ主体的に行動する文化を根付かせることに繋がるものである。

— 課題 その先へ —

現在進行中の鉄道会社の大規模改修や道路会社の大規模更新及び大規模修繕のほかに、各団体で長寿命化工事が実施されるなか、2020年には東京オリンピックが開催される。今後建設業界は膨大な労働力が要求されるが、現在でも労働力不足は深刻であり、ベテラン職人の高齢化や若年層の業界離れが問題になっている。国交省や厚労省では、平成25年6月に「当面の建設人材不足対策（概要）」を発表するほか、設計労務単価の引上げや、社会保険未加入

問題、適正価格による工事発注、部切り撤廃の指導等様々な対策を掲げて、賃金水準のアップと社会保障の充実を呼びかけている。我々の役割は、上記への推奨は勿論であるが、現場において安心できる環境と安全を得る教育を提供する必要がある。

“もの”創りの最終段階となる現地工事は機械化が進んだとはいえ、まだまだ人の力が必要である。顧客の要求を満足する構造物に仕上げるためには、設計や計画から最終段階を予測しておく必要があり、現場では設計や計画の思想に沿って着実に遂行し、怪我なく日々の作業を行う事が基本である。

そのためにも、各部門の風通しを良くすることが必要である。例えば、失敗や苦労情報、創意工夫が各部門で共有出来れば、各々の工程の落とし穴や対策が部門の垣根を越えて予備知識としてインプットでき、リスク管理の幅が広がる。…が、失敗はなかなか表面に出てこないものである。せっかくの失敗体験を公表できる風土を築くことが出来れば、格好の成長材料となる。企業は個人の集まりであり、個人の成長はそのまま企業力となる。そして各部門の知識が他部門の知識と融合され、より高度な技術集団へ成長できる。そのような構想を描いている。

好き勝手な思いを述べましたが、第28号技報の発刊に際し、忙しい時間を裂いて貴重な職務体験を公開して頂いた方々には感謝いたします。